

腐女子で引きこもりの姉は隠居したいが、
義弟がそれを許してくれない

登場人物紹介

アルフレッド

伯爵家の執事長。寡黙で堅物。
年齢60歳とは思えない
筋骨隆々とした肉体の持ち主。

ジェーン

伯爵家のメイド長。
超下級の生真面目。
仕事は完璧にこなす。
ラースと同じ国の出身。

ラウレンティウス

ユイリーの義理の弟。通称ラース。
祖国で起こった反乱から逃れ、
伯爵家の養子になった。
冷静沈着で天才肌。

イヴリン

ラースに想いを寄せる令嬢。
見栄っ張りの負けず嫌い。
その出自にはなにやら
秘密があるようで――？

フォンベッシュバルト

公爵家当主。
儂げで、物腰柔らかな美青年。
普段は温厚だが、怒るととても怖く怖い。

ユイリー

腐女子で引きこもりの伯爵令嬢。
義弟ラースの成人を機に、彼に家督を譲り
隠居生活をしようと算段中。
幼い頃、ラースに一目ぼれをする。

第一章 出来のいい義弟と悪い姉

生まれてすぐに母を亡くし、それを不憫^{ふびん}に思った父に甘やかされて育ったわたし、ユイリー・ケープハルトの幼少期は、それはそれはもう目も当てられないほどの我が儘小娘——というかクソガキだった。

入ったばかりの使用人が皿を割ったときだって……

「さっそく粗相^{のたま}するなんて、子犬よりもしつけがなっていないじゃないの。あなた、人以下ね」などと、宣^{のたま}うクソガキである。

雇われの身でなに最速でやらかしちゃってるわけ？ サイテーなんですけどおー。

どんくさいったらありやしないわ。見ているだけでイライラしてくる。クビよクビっ！

などと、本気で思っていたクソガキである。

「使えない人間など我が家には必要ありませんわ。ふふっ。だって、お父様が雇っているのに、なにを遠慮する必要があるのかしら？ 使用人に気遣いなんて無用の長物^{ちやうぶつ}……ですわよね？」

令嬢よろしく「ホホホ」と笑って、意地悪く扇を片手でパタパタさせながら、悪口陰口ばかりに舌がよく回る。人を貶める^{おとし}ことに余念のないこの生き物をなんと呼ぼう。

——そう、正しくクソガキで（以下同文）。

性根が腐ったまま生きてきたお陰で、わたしには一人もお友達と呼べる相手がいなかった。

「ふんっ、別にいいのよ。わたし伯爵令嬢だし、お金もあるし、一人でも生きていけるもの……」
不安になると決まってわたしはこう言っただけ自分を慰めた。

今となつては過去の自分を恥としか思っていないが、当時のわたしは陰で皆からとんでもないクソガキ認定をされていることに心底憤っていた。

使用人達からはもちろんのこと、お父様以外の近しい人達からも敬遠されている。

そんな状況を理不尽に感じ、自分を持ち上げない奴らをタコのように茹で上げたい、と調理場に行つて大釜で湯を沸かすくらい荒んでいたわけだ。

もちろん、泡を食つたお父様に止められたけど。

わたしの住むシンフォールスは、海岸に面した資源豊かな大国でタコが沢山獲れる。

人を茹でるのを止められたわたしは、その鬱憤を晴らすため、料理長に大釜でタコを大量に茹でさせた。それを一人もつきゅもつきゅと頬張つていても、お父様は「我が娘は（頬袋に食べ物を詰め込んだ）子リスのような愛らしさだね」とべた褒めの激甘。

後に「タコ茹で事件」と言われるようになるこのときも、やっぱりお父様はわたしをお叱りにはならなかった。そう、正しくクソガキが誕生したルーツはここにある。

伯爵家の当主であるお父様に頼めば欲しいものはなんでも手に入ると豪語し、使用人や従者を使い捨ての消耗品のように扱い、我が儘が服を着て歩いているようなわたしを許してしまう……。お

父様は超親馬鹿だった。

国王の右腕とも称されるお父様も人の子である。多少は大目に見てやってほしい。が、一つだけ、どうしても当時のわたしを止めてほしかったことがある。それは——

ラウレンティウス・スピアリング。

お父様以外で唯一、わたしに安らぎをもたらしてくれる人物だ。

後に、とんでもないクソガキだったわたしが彼に犯した数々の愚行を死ぬほど後悔することになるのだが、それはひとまず置いて……

彼と初めて顔を合わせたのは、わたしが十歳で彼が六歳の頃。普段わたしには甘い顔しかなさらないお父様が、いつになく改まった様子でいらしたから、その日のことはよく覚えている。

*

春の木漏れ日が優しく溢れる、ある日の昼下がり。お父様に部屋まで呼ばれたわたしは、そこにいた人物に目を奪われた。

黄金色の髪と瞳、褐色の浅黒い肌を持つ異国の美しい少年。ここまで綺麗な人間を見たことがない。

口をポカンと開いて驚くわたしに、お父様は言った。

「今日からこの子はユイリーの弟になるんだよ」

いきなり義弟ができた事実よりも、この綺麗な少年と知り合えたことが、ただただ嬉しかった。頬が勢いよく紅潮していくのを感じる。

「弟……？ お父様、この子はなんという名前ですか？」

無遠慮にも上から下まで舐めるように眺めるわたしの問いに答えたのは、綺麗な少年だった。

「……ラウレンティウス」

「ら、らうれ……」

あまりに長い名前に、舌がもつれる。このままでは呼ぶたびに嘔みそうだと思ったわたしは、彼の呼び方を勝手に決めた。

「じゃあ、あなたは今日からラースね！ わたしはユイリー。今日からラースのお姉さんになるの。よろしくね」

「ユイリー？ ラース……？」

「そうよ。短いから言いやすいでしょ？」

「……うん」

ラースの故国、ローツェルルツが奴隷の反乱で崩壊したのはつい先日のこと。王子だった彼は処刑から逃れて、複数の家臣に守られながらうちに辿り着いた。

なんでもラースは遠い昔、もう何世代も前にうちから嫁いでいった血筋の、その子孫の末裔だとかで、つまり遠縁に当たるそうだ。

その微かな希望を頼りに訪れたラース達を、お父様は受け入れたのだという。王の有力な補佐官

であったお父様は、早急に王との謁見を申し出、名目上は亡命としながらもラースを養子に迎え入れることを承諾させた。さらには、ラースと共に亡命してきた家臣達も引き取ったのだ。なんという懐の深さ。

しかし、そう説明を受けている間もわたしは目の前の美少年に釘付けで、お父様の話をほとんど聞いていなかった。

初めて会ったときラースはとても大人しくて、周囲の人間を極度に恐れていた。反乱によって国を追われ、家族を亡くし、全てを失った幼い王子は深く傷つき弱っていた。

塞ぎ込みがちなラースに、お父様はとても優しく接し、家族として受け入れるのに少しの躊躇いも見せなかった。

そんなお父様の姿に、当時、政治に全く興味の欠片もなかったわたしも感銘を受け——この新しくできた義弟を守らなければならない、そう思った矢先……

「うちにはユイリーしかない。だから君が成人したとき娘を娶って家督を継いでくれないか？」

「お、お父様っ!？」

お父様がとんでもない爆弾を落とした。

最初はなにかの冗談かと思っていたのだが、それからというもの、お父様が同じ話をラースにしているのを、ことあるごとに聞かされ続けることになる。

そうして体にビリビリと電流が走るような、運命と勘違いするくらい衝撃的だったラースとの出会いから一年ほどが経過した。

この頃にはラースはすっかり我が家に馴染み、明るさを取り戻していた。彼からはいつもお日様の匂いがした。

というのも自ら申し出て、乗馬や剣技などの訓練を受け、日差しを浴びることが多かったからだ。体を動かすのが好きなラースは常日頃から稽古に励み、けて鍛練を怠らない。

聞くとところによると座学のほうも優秀らしく、ラースは多分、相当に頭がいいはずなのだ。なのに、我が儘なわたしの言うことを素直に聞いて、ニコニコと天使のような笑みを見せる。

社交性にも優れる完璧を絵に描いたような義弟。

もはや愛される要素しかない四つ年下の義弟を、周りは放っておかなかったし、一番身近にいるわたしがラースに惹かれないわけがなかった。

むしろ、わたしは彼があまりに周囲に愛されすぎて焦っていた。

このままでは伯爵令嬢という立場以外なんの利点もない平凡で冴えないわたしなど、すぐにでも視界の隅の隅に追いやられる。

いずれ爪の先ほども、いや、ちんまいミジンコほども気にされなくなるハウスタストなゴミカス未来へGO！

——を想像し、焦ったわたしがなにをやったかというところ……ラースを己の装飾品のごとく扱い、所有権は自分にあるかのように振る舞った、のである。

当時行方不明だった自制心を、今からでもとつと探しに行きたくなくなるくらい最悪な行動のツケは、もちろんすぐに回ってきた。

あんなに懐いてきて可愛かったラースが、徐々にわたしを避け始めたのだ。

しかし、ラースに夢中になっていた当時のわたしは、「わたしにしては珍しく嫌がらせもしないで可愛がっていたというのに、なんで？」と厚かましくもショックを受け、原因が分からず悩んでいた。

どうにかして離れていくラースを引き留めたくて、とにかく必死だった。

矜持も体面も、なにかもをかなぐり捨てて一心不乱に謝罪した。

ストーカーのように毎日つきまとい、先回りして中庭の垣根からひよっこ顔を出すくらいには、色々やってのけたものだが、結局どんな言葉も受け入れてはもらえず肩を落とす。

さらには周りからどんな噂を耳にしたのか、時が経つにつれて、ラースは一緒に空間にいることすらそうそう許してはくれなくなった。

まあ今となつては言われなくても分かる。

所有物扱いされたら誰でも嫌になるし、あとはきつと、ラースになにかとんでもないことをしてしまったに決まっている。

でもあの頃のわたしはそれすら理解できず、「わたしはラースに爪の先どころか、ちっちゃなミジンコほども気にされていないんだ」と見捨てられた子犬のような心境で、こっそりラースを眺める時間だけが増えていった。

許してもらいたくても許してもらえないこともあるのだと、唯一無二の癒しを失って。

そうして少しは学んだかと思いきや、諦めたわたしがまずしたことはラースをいじめることだっ

た……

愛情と増悪は紙一重とは言うけれど。ええ、分かっているわよ。自分でもサイッテーな救いようのない人間だったってことは。

自分のことを振り返りもしない。裏切られたと思い込み、とにかく荒れていたあの頃。ラーズの持ち物を取り上げ、お気に入りの玩具を隠し、ドアを開けると部屋中カエルだらけなんてこともしてやった。中庭を散策しているラーズめがけて、バルコニーからカエルを沢山降させたこともある。ラーズやその隣を歩く友人に投げつけもした。

お陰で「カエル姫」なんて不名誉なあだ名が使用人達の間でつけられるくらい。

なぜそうまでしてカエルに固執したかというと、珍しモノ好きのお父様が取り寄せた特大サイズの食用ガエルが調理場にたまたま大量に仕入れてあったからだ。他意はない。

使えるものはとことん使う。わたしは素直なお子様だった。

ぬちよっとしていて気持ち悪いし見た目はアレだが、嫌悪感よりもわたしの中にドロドロと渦巻く薄汚い復讐心の方が勝っていた。

お陰で義弟はとてつもないカエル嫌いに育った。

ちなみに嫌がらせで使ったカエルは、全部綺麗に回収されてお父様の胃袋に収まっている。そしてもちろん、このときもお父様はわたしをお叱りにはならなかった。

ちよっと困った顔はしていたけど、カエルに怯えて泣いているラーズの頭を、お父様はポンポン叩いて慰めていたつけ。

そうしてわたしはラーズに相手にされない鬱憤を、カエルを使った復讐で晴らしていたわけだ。しかし、一方的に当たり散らしておきながら、心はいつもズキンと痛んで寂しくなった。

……もちろんわたしはすっかりラーズに嫌われてしまった。

カエル同様、ラーズの大嫌いな存在へと、出会って一年ちよっという短い期間で転身し、落ちるところまで落ちた。ラーズにとって「カエル、イコール、わたし」として立派に認識されたのである。ワー、パチパチ……嬉しくない。

年齢を重ねるにつれ、わたしは縋りつきたくなくなるくらい、酷い後悔の念に苛まれるようになっていった。

結局どうにもこうにもいかなくなったわたしが取った手段は、妄想の世界に逃げることに。

冴えない現実から目を背け、屋敷の書斎に入り浸り、本に没頭する。

そうして現実を忘れようとしていたというのに、わたしはあるうにか、本の中でもラーズによく似た登場人物に惹かれてしまったのだ。

それもBし本！ 腐女子爆誕!!

いやいやいや爆誕じゃないわよ。じょーだんじゃない。

どこまで絶望の淵を突っ走れば気がすむのだと突っ込みを入れながら、最初はお馬鹿な自分を否定した。けれど「頭の中でならどう妄想しようと思手よね？」と結局自分を甘やかす、ずるずるとフリーダムな妄想の世界に引きずり込まれていったのだった。

すっかり引きこもりになり、現実から逃げ続けて早、六年。

十七歳になったわたしがあある最悪なことに気付いたのは、伯爵令嬢として華々しく社交界デビューを飾ったときだった。

パーティーで次々とダンスを申し込まれ、相手の男性と触れ合うたびに、体が拒否反応を示すようになったのだ。最初は軽い違和感程度だったそれは、最終的には、手を繋ぐだけでゾッと全身に鳥肌が立つまでになった。

それでも、慣れないお酒でなんとか気を紛らわせながら頑張っていたのだが……

わたしはせっかくの社交界デビューを這う這うの体で逃げ出した。真っ青な顔をして帰り、お父様の不在の代わりに家にいたラースに、何かと駆けつけられてしまう始末だ。

「いったいどうしたんだ？ なにか……嫌なことでもされたのか？」

「なんでもないのよおー、ちょっと気分が悪いだけ！ だから、わたしのことはほっといてちょうだいっ！」

「……酒臭い。酔っぱらってるのか」

「ぜえったい、触らないでよお？ 自分の部屋くらい自分で歩いていけるんからあ」

明らかに舌が回っていない。

酒が入り、疲弊した体で暫く玄関先をふらふらと漂っていたら、見かねたラースに舌打ちされて軽く抱き上げられてしまった。ふわりと彼の香りが広がり、心臓が早鐘を打つ。

そんな自分を悟られないよう嫌々と暴れてもまるで歯が立たず、そのまま自室へ運ばれてしまう。

「姉さん、なにやってるんだよ……」

「触るなあー、バカァー」

厳しい顔でこちらを見下ろすラースから逃れたくて、ぐいっと彼の広い胸を押した。

「っ、たくしやうがない人だな」

「一人で歩ける！ 下ろして！」

「無理だから——っ、髪を引っ張るな！ ああ、くそっ。なんだってこんな面倒なんだよ、あんたは！」

「ら、ラースが怒ったあ」

「怒ってない！ 怒ってないから泣くな！」

「嘘らあ」

完璧なる絡み酒だ。

小さな子供ののように唇を囁んで、メソメソと腕の中で泣き始めた姉を抱えるラースは、さぞ困ったことだろう。

わたしに呆れたラースの声だけが耳に残っている。

ちよっただけ心配しているような顔を見せたんだけど、使用人が持ってきたボウルに吐いて寝ちゃったから、部屋に着いてからのことは正直あまり覚えていないのよね。残念ながら。

それから朝起きて正気に戻ると、ラースからこっぴどく怒られた。暫くの間、お酒を禁止されたのは仕方ないことだ。

普段から体を鍛えているラースは力が強い。だから無様にも酔い潰れそうになっている姉を、かなり小柄な方とはいえ軽々持ち上げられたわけなんだけど。

当時、ラースは弱冠十三歳だったが、既に並みの大人に負けないくらいの腕力と肉体を手に入れているし、お父様の代理を安心して任せられるくらい頭も良く弁も立つ。

この頃にはもう、将来有望な美しい義弟に対する女性からの熱い視線が半端ないことになっていた。

ラース以外の男性などあり得ない、などという熱狂的な女性までいて、「これは成人したら大変なことになってそうだわ」と他人事のように思っていたのだが、それが今回のパーティーで一変した。

最悪なことに、わたしも義弟を取り巻く女性達の中の例外ではなかったようなのだ。

わたしは最初、この鳥肌現象は引きこもり生活が長かったせいで、男嫌いになってしまったのだと思っていた。

しかし、ラースに触れられてもちつとも鳥肌は立たなかったし、何年ぶりで傍にいられることが、ちゃんと口を利いてくれることが、嬉しいとさえ感じていた。

——義弟以外の男の人には触られたくない。

そう思っている自分に気付いて、愕然とした。

それまでわたしはラースのことを弟として愛しているし、この執着じみた想いは、所有物がなくなったことへの不満がまだ心のどこかに残っているのだろと思うていた。

ラースに似た登場人物が出てくるBL本を読むのは、相手にされない寂しさを紛らわすため。そう解釈していたのに、まさか恋愛対象としてラースを見ていたなんて。

よりにもよって社交界デビューの年に、ラースに固執しまくるこの感情の正体に気付くとは。

困ったことに、どうやらわたしは相当にラースを愛しているようだ。おそらく初めて出会ったときから。

お陰で社交界に行ったのは一度きり。あーあ、これでわたしは一生独り身確定かあ。

いったいこれはどんな罰なんだろう。あれほどいじめ抜いた相手を好きになるとかあり得ない。なにより自分の気持ちを知った途端に失恋とか最っ高に惨めだわ。

だけどもあ、今までラースにしでかしたことを思えば、当たり前前の結果だ。

わたしだって幸せな結婚とか恋人とか、普通の女の子が夢見るようなことに憧れぐらいある。

今回それが叶わないと分かったことは確かにショックだったけど、わたしには本がある。だから全部が全部ダメになったわけじゃない。好きなものがあるだけ、まだましなんだ。

全てを諦めて——しかし、それからすぐだ。

なにもかも望まぬ方向に変わってしまったのは。

わたしの十八の誕生日。シンフォールスでは成人となるその年に突然訪れたお父様の死。

お母様はわたしを出産したときに既に亡くなっている。

一人娘だったわたしは伯爵家の家督を女の身でありながら引き継いだのだが、本来、女が当主に

なるなどあり得ないことなのだ。

しかし特例として王命が下された。

このような措置が取られたのは、お父様が優秀な王の補佐官であり、王の友人だったからに他ならない。

お父様は最期まで、こんな不出来なわたしを愛してくれた。

けれど、そのお父様が残された最期の言葉が問題だったのだ。

『うちにはユイリーしかない。だから君が成人したとき娘を娶^{めと}って家督を継いでくれないか？』
どうやらお父様は本気でわたしをラーズの妻にしたかったらしい。

今までも、ことあるごとに繰り返されてきたフレーズ。きっかけは慣れない遠い異国の地で苦勞するラーズが、少しでも早く我が家に馴染むようにと、気を遣われただけだったのかもしれない。ラーズがうちに来たばかりの頃は、それを聞きたびどう反応したものが困って、わたしはオロオロと顔を真っ赤にさせていたものだ。しかし、ラーズに避けられるようになってから、わたしはそれを全力で拒絶するようになっていった。

お父様がラーズにその話をするたび、『ご存じでしょう？ 冷えきったわたし達の間係を。ですからもう少し配慮していただけないものでしょうか……』と、気まずい思いで一杯になった。

一生独り身確定だと思っていたし、ほとんど冗談としか受け取らなくなっていたというのに。

最期のとき、お父様の言葉を真摯に受け止めていたラーズの顔が忘れられない。でもってわたしは、「わたしのこと心底嫌いなくせにラーズは本当にそれでいいのかしら？」なんて他人事のように

に思っていたのだ。

こうしてわたしは、お父様を亡くした十八の誕生日に女でありながら伯爵家の家督を継いだ。

けれど、将来有望株の義弟と違って政治的な才覚などまるでないわたしは、当主として正式な場に出るのが心底苦手だった。

小さい頃はあんなに平然と人をあしらっていたのに、引きこもり生活が長かったせいか会話すら億劫^{おっくう}で、人前に出るのは好きじゃなくなっていた。

だから、どうしようもなく嫌なときは体調不良を理由に逃げた。

ううつ、またやつちやつたわ。本当にダメダメな当主……と己を責めながら、仮病がバレバレでも構わず布団の中に潜って丸くなる。

そうして嫌なことが過ぎ去るのを待っていると——不思議なことに決まってラーズが助けてくれるのだ。

わたしの代行として当主の仕事を処理してくれたことを、後になって人伝^{ひとづて}に聞かされる。

思わぬ助けにホッとして、けれどそのたび自分を情けなくも感じていた。

そんな折、それまで飴^{あめ}に集る蟻のように寄ってきていた取り巻き達は、手のひらを返して次々とわたしの周りから消えていった。

傷付いてる場合じゃないわよ、わたし！ しっかりしろ！ 大人のわたしがラーズを守らないといけないんだから！

とまあ初めは布団に潜り込みながらも、なんとか必死に自分へエールを送って、一応姉らしく頑

張ろうとしていたのだ。しかしそれも、お父様が亡くなった途端、消えていった彼らがどこへ行つたのか、知ったときのショックで一気に萎えた。

取り巻き達が次に集った先はラーズの元だったからだ。

あの、幼き頃の「タコ茹で事件」以来、わたしにはムカつくたびにタコを茹で上げる習慣ができていた。

だからこのときも、タコを茹で、一匹だけじゃ腹の虫が治まらないわ！ と、タコを一匹、二匹、三匹、四匹……と丸飲みする勢いでどか食いした。そうして腹痛で医者にかかるくらい愚かなわたしについてくる人間なんて、ただの一人もいなかった。

正直、涙も出たし、悔しかった。なにより出来損ないの自分が一番嫌いになった。

一人で生きていくしかないんだなあ、とボンヤリ思って、人間って所詮こんなものなのね、とつくづく実感した。

でもあと四年、ラーズが成人するまでの四年間だけ我慢すればいい。そう思ってたなんとかやりくりしていたら、

『――姉さんは当主に相応しくない』

グサリと刺さる止めの一発を吐かれた。

わたしの心はラーズにバツサリ切り捨てられた。

これってあれね。傷口に塩ってやつ。要は自分が成人したらサツサと家督を譲ってことね。嫌いなわたしを嫁にするという罰ゲーム付きでも、お父様の遺言だから致し方ないと……

でも、自分が出来ないのはちゃんと分かっていたから特に反論はしなかった。

とはいえ、あの台詞を思い出すだけで傷口をえぐられるように胸がズキンと痛くなる。

まだ当時十四歳だったラーズに浴びせられた冷たい言葉。励ましでもなく、感謝でもなく、貶めるためのそれわたしは深く傷付いて、誰もいない場所で静かに泣いた。

心に深い爪痕を残したその言葉は、同時にわたしへの最終勧告となり、しおらしく受け入れるのかと思いきや……

「ふんっ。わたしはあなたのお嫁さんになんてならないわよーだっ」

しおらしかったのはほんの数分間だけだった。

結構こたえたけど、泣くだけ泣いてすっきり再起を果たしたわたしは完全にやさぐれていた。なにも言わずに姉の代役を淡々と続けるラーズは、養子に迎え入れてくれたお父様に強い恩義を感じている。だから彼が密かにわたしを助けるのは、偏に伯爵家の威信を守るためなのだろう。

伯爵家を大切に思っているラーズに家督を譲ることに、わたしはなんの異論もない。しかし、プライドをここまでズタボロにされた上、便宜的に娶られるなんてサイテーだ。

それにわたしはラーズのことを愛しているけれど、ラーズは違う。

どんなに体裁を取り繕っても、本心ではきつと、嫌いな相手との結婚なんて望んでいないはず。だからお父様の遺言に逆らうことになっても、それだけはどうしても避けたかった。

やっぱり大切な弟には幸せになってもらいたいものね。

と、いうことで。お姉さんは隠居生活の準備をします！ お父様、ごめんなさいっ！

こうしてわたしはラースが成人するそのときに、家督を譲って家を出る——隠居することを決めたのだった。

四年間当主として居続け、ラースが成人したら家督を譲って家を出る。

そうして全てが終わったら田舎いなかでのんびり隠居生活をしよう。

大好きな本だつて沢山読めるように手配すればいいんだし、誰の目を気にすることもなく暮らしていきるなんて、腐女子で引きこもりのわたしには天国じゃない？

そう自分に何度も言い聞かせながら、どうにも全てが空回りするばかりだった当時のわたしは、密かに隠居生活の準備を進めることにしたのだった。

*

さらに月日が経ち、あれから四年が経過した現在。

二十二歳となる今でも叶わない想いを引きずるわたしは、結婚を諦めて、未だ恋人の一人も作れずにいる。

ラースがわたしの代わりに仕事をこなして帰ってくるのを、毎日のようにエントランスの階段の隅でこっそり眺めながら、「やっぱり今日もカッコいいわ」と呟つぶやく。

そうして一人だけ時が止まったかのように動けず、落ちぶれた自分とは正反対の華やかな義弟が、明日十八歳の成人を迎える。

ラースが家督を継げるようになるその日はつまり、わたしの存在が不要になる日でもある。

そして相変わらず、独りぼっちの寂しさを募らせながらラースに拒絶され続けるこの家に、わたしの居場所はない（キツパリ）。

この四年間、わたしが毛布くるもに包まって嘆いてる間も、淡々と伯爵家のために尽くす義弟はもはや神々しい生き物だった。

昔も今も、それはもう後光が差すくらい素敵で……

ラースに言われた通り、わたしはまず見た目からしてこの家の当主には相応しくないのよね。

生前はシンフォールス随一の美女と謳うたわれたお母様に似ず、地味で目立たない平均的な顔立ち。

腰まで真っすぐ伸びた黒髪と黒い瞳は我ながら陰気臭い。その上、長年引きこもりで日光を浴びていないから色白で血色も悪い。

身長も低く小柄で、胸があるのがせめてもの救いだと思っくらい、見た目も中身も凡庸ぼんようで冴えない伯爵令嬢だもの。これじゃあとても当主だなんて言えない。

うん、やっぱりわたしじゃあてんでダメだわ。

最近では、着替えが面倒だからと寝間着で屋敷をうろつく始末。

もちろんそんな格好でいるのは屋敷の中だけに限られるけど、それを目にしたラースは毎回顔を顰しかめる。徹底的に知らんぷりで通していたらとうとう先日、不精にもほどがある、と苦虫を噛み潰したような顔で注意された。

それでもめげずに寝間着でうろついていたら、昨日はものすごい目で凄まれた。

仮にも伯爵家の当主として誉められた姿ではない。

そう訴えるラーズの非難の視線が、彼の前を通り過ぎるたびに背中に刺さるのを感じながら、無言の圧力に屈せず今のところどうにか耐えている。まあほとんど風前の灯火だが。

とりあえずわたしから言えることは……ラーズが、ラーズがつ！　このところめっちゃ機嫌悪くて怖いっ！　半泣き。ということだった。

以前はわたしがいても空気がみたいに素通りしてたくせに！

なぜだか最近、ラーズはことあるごとにわたしに突っかかってくる。

今ではすっかりわたしにお小言を言うのが趣味というか、習慣？　になっちゃってしまっているようで、実に板に付いた小姑っぷりだ。

ちゃんと迷惑かけないように布団の中か書斎で大人しくしてるのにー！　いったいなにが気に入らないっていうのよおーっ。

ハッ、もしかして……！　いよいよ家督を継ぐから、ラーズ、緊張してお腹でも壊しているんだろーか。

……うーむ、それは不味いぞ。ここは念のため、腹痛の薬でも調合するよう医師に申し伝えることにしよう。

それにしても、ラーズってば、昔はあんなに可愛くて天使だったのに、今ではいつも周りに女性を侍らせる天性のタラシに成長しちゃって。

わたしには口も愛想も悪いのに、世渡り上手で外面も良い。世の中って不平等。落ちこぼれの自

分とは雲泥^{うんでい}の差だ。

ラーズには異国の血が混じっているせいか、筋肉質だがスラリとした肢体はエキゾチックで妙に色っぽい。その褐色の肌と黄金色の髪と瞳は人を惹きつけてやまない。

ラーズは真正銘の美青年だ。

文字通り美少年から美青年へ、立派に成長したラーズを見るたび思う。わたしなどいなくても彼は十分豊かな人生を送ってゆける。むしろわたしが足を引っ張っているのだから、隠居宣言してもきつとサラッと許してくれるはず！

明日、ラーズは成人する。四年前に決めた通り、ラーズを自分というしがらみから解放してあげよう。

どうにかこうにか思考がまとまり、わたしは伯爵家を出ることを義弟に伝えるべく、布団から抜け出した。そして、寝間着姿で決意を新たに、足取り軽くラーズの部屋へ向かうのだった。

第二章 隠居宣言

少し想像してほしい。

好きな人の体に厭^{いや}らしく手を回す女達という凄惨^{せいきん}たる光景など、誰が望んで見たいものだろうか？

もちろんわたしは見たくない。見たくない。……だ、か、ら、見たくないってのにつ！

眼前のカウチソファーに女達と寝そべっているラースに、わたしの目は釘付けた。

さっきまで、ルンルンでラースの部屋に隠居宣言しに来たわけよ。それが、なんで、ラースの情事を目撃しなきゃならないわけ？

時刻はもう昼の十二時を回ったというのに、部屋の中はカーテンが閉ざされたままで薄暗い。化粧と香水と他に、お香だかなんだかのよく分からない官能的な臭いが充満していた。

そして、なにより酷かったのが。

き、キスしてる……

ラースと隣に寝そべる女の一人が濃厚な口づけをしている。

わたしは部屋の扉の前で呆然と立ちながら、込み上げる吐き気にグッと口元を手の甲で押さえた。普段から女を連れ込んでいるラースが、部屋の中でなにを行っているのかなんて知らなかった。幼い頃に拒絶されて以来、それ以上嫌われるのが怖くて彼の部屋に近づくこともできなかったのだから。

でもまさか……体を動かすのが好きなのは知っていたけど、運動は運動でもまさかそっちの方にいくとは思ってもいなかった。ショックで頭の中が真っ白だ。

はあ……それにしても、なんなのこの不快な臭い。でもってものすごくククラクラする。

全身から血の気が引き、ガクンと膝から崩れそうになるのを必死に我慢した。——これ以上、こ

こにいたくない。ぐらつく頭で部屋を出ていこうとした、そのとき。

「姉さん？」

ようやくわたしの存在に気付いたラースが、目を丸くしてこちらを見つめている。

気付くの遅い。キスし過ぎなのよっ！ 馬鹿ラース！

チラッと視線をやると黄金色の瞳と目が合う。

「また日を改めます……」と言おうとして気が付いた。

明日はラースの誕生日。家督を譲る前に、隠居のことを伝えるタイミングは今日しかない。

し、仕方がない。逃げるのだけはどうにか堪えよう、とぐつと足に力を込める。そのとき、耳障りな甲高い声が室内に響いた。

「いやだ！ あれがラースのお姉様？ てつきり使用人だと思ったわ！」

「でもあの格好！ 寝間着でうろつくなんてはしたない。使用人の方がまだわきまえているのではなくて？」

「ふふふつ。これまた随分と子供じみたご当主様ですこと」

こ、子供——ッ!?

さっきから随分好き勝手言ってくれるじゃない！

小馬鹿にしたような女達の笑い声に、できることならこのまま回れ右して、自室か書斎に引きこもりたかった。とりあえず、四散しかけた理性と知性を総動員して、どうにか体裁を守ろうと努める。

落ちて着けわたし。わたしは大人、わたしは大人、わたしは大人……

「お母様はシンフォールス随一の美女でしたのに……残念ですわね。ああ、でもお飾りの当主としては上出来よ？ 一目で似非者だつて分かりますもの」

——今、なんと？

ラースとキスしていた女から発せられた言葉に、わたしはぶちっとキレた。

ソファアに寝そべりながら、女達の中心にいる義弟——ラースに冷たい視線を送る。そして、汚らしいものでも見るような、恨み辛みのこもった蔑みの目で女達を睨みつける。

「おだまりなさいッ！」

怒りに燃えたわたしの激しすぎる感情に当てられて、女達がビクリとひるんだ。

よくもわたしのコンプレックスど真ん中を刺激してくれたわね？ 誰かタコっ！ タコ持つてきてっ！ と、猛烈にタコを所望するくらいに腹を立てていた。

「いやだわ、部屋の中に虫が」

わたしはそう呟くと、躊躇することなく、ポケットから取り出した物を女達に向かってぶん投げた。

売られた喧嘩だ、遠慮することはない。

「キャ——ッ！ やだっ、なによコレッ!?」

「冗談じゃないわよ！ ヴィンテージものの留め金が！」

「お父様からいただいた珍しい異国の毛織物がパアじゃないっ！」

気持ちいいくらい狙った通りの甲高い悲鳴が次々あがる。

先ほどわたしが投げつけたのは、ハーブ入り害虫防止スプレーだ。正規の使用方法を丸々と無視して蓋を取り、中身の原液が飛び散るようにして投げたのだ。

綺麗な弧を描いて飛んだそれは狙い通り女達に降りかかり、部屋の壁にバリンツと当たって壊れた。容器の素材はガラスだから極力女達に当たらないよう注意はしたが、彼女達にはそんなことは関係ない。カンカンにお冠である。

今にも掴み掛かってきそうな女達を前に、一呼吸してから腹にグツと力を入れると、わたしは人差し指を立てて口の前に当てた。

「皆様、お静かに」

さっきまで言われっぱなしのサンドバッグだったのに、害虫防止スプレーをぶん投げるという所業。さらにはシートと子供にするみたいに注意されて、状況を掴めない女達はポカーンとしている。「それ以上当家で騒がれるのは少々、いえ、ものすごく迷惑ですわ。お帰りくださいな」

してやったりと笑うわたしを見て、我に返った皆様は、一律「はあ？」と額に青筋立てて怒り心頭だ。そこでようやく義弟再登場。もちろんこっちも怒ってた、相当に。

「姉さんっ!? なにやってるんだよ！」

ラースが出てくるまで大分間があったな、と悠長なことを考えてる場合じゃないんだけど、ラースのこんなに怒った顔を見るのは久しぶりだ。

もちろん彼も頭から原液を被っている。扉の前にいるわたしの近くまで来たラースからは、ハー

ブの爽やかな匂いがした。

「わたしが当主を務めるこの屋敷に無断で入り込み、淫行にふけるなんて許せません。それに、大人しく帰るならそれを不問にすると言っているのです」

しらないっ。わたしはツンツとラースから顔を逸らした。

すると、彼は目を睜めて声を荒らげる。

「姉さん！」

はい、嘘です。調子に乗りました。無断でもなんでも、ラースの知り合いが屋敷を出入りするのにいちいちわたしの許可なんていりません。他になにとも言えないから立場を乱用しました。でもちよつと格好つけたかったんです。

内心では平謝りだが、ここで素直に謝るわけにはいかない。頑として自分の方を向こうとしないわたしを、ラースは咎めるように見据える。

今更風紀を乱すなど言われても……ということなんだろうけど、でもここで、負けるわけにはいかないのよ！

そう思っていると、「お、お父様に言い付けてやるわ！」「似非者のくせして生意気よ！」「ラースに助けてもらわないとなにもできない木偶が偉そうに！」と罵詈雑言が女達から飛んできた。

ちつとも応えていない様子に逃げ出しそうになるが、ここが踏ん張りどころだ。

……仕方ない、こうなったら奥の手だわ。

「そうですか。では皆様が当家でどのような振る舞いをなさっているか、うちの執事からご両親に

連絡させましょうか？ 結婚前の純潔を尊重している貴族の方々なら、きっと大いに関心がおあり

だと思えますの」

数撃ちや当たると言うが、やつと一撃が効いたようだ。一斉にピシッと固まった女達を前に、わたしは「お帰りはあちら」とドアを指してにつこり笑った。

「どうぞ、お引き取りくださいませ」

あと少し。あともう少しで女達をラースの部屋から追い出せる！

しかし、ここで思わぬ邪魔が入った。

「——きゃっ！ ラース!? それを返しなさい！ ラース！」

実はもう一つ予備のスプレーをポケットに忍ばせていたことがバレて、それをラースに取り上げられてしまったのだ。まだなにか言うようなら、隙を見てもう一度吹きかけてやろうかと思っていたのに……これでは台無しじゃないのっ！

取り返そうと必死に手を伸ばしたが、ラースに高く持ち上げられてしまつて届かない。

それでも諦めきれなくて、わたしより一回り以上大きいラースの体によじ登ろうとしたら、今度こそキツパリ怒られてしまった。

「ユイリィ、これ以上は駄目だ」

「……っ！」

「それと君達も引いてくれ」

ラースは冷たい表情で言うど、片手でわたしの体を難なく取り押さえた。ラースに名前と呼ばれ

るなんてことは滅多になくて、わたしは口を噤んだ。

しかし、ラーズの様子に圧倒されたのは女達も同じだったようで、全員青い顔をして息を呑み、大人しく押し黙っている。

ちなみに取り押さえたといっても、ラーズはわたしが一応当主であることを考えてか、手荒に扱ってはいない。傷付けないよう注意深く抱き上げられて、わたしは俯きがちに彼を一瞥した。

これは……本気で怒ってる？ 怒ってるよね？ 怒ってるかあ。

ラーズはわたしがどんなに我が儘を言っても、ハチャメチャなことをしても、結局最後には許してくれる。わたしにはぶっきらぼうで口は悪いし、顔を合わせれば喧嘩ばかりだけれど、ラーズが他人に好かれるのは理解できる。

ラーズは見た目だけじゃない。どんな人も大切にする、優しくて良い子なのだ。

当主の仕事だつてなにも言わずに助けてくれるし……ラーズって世話焼きタイプ？ そういう性格なのかしら？

力のあるラーズに抱えられると、互いの身長差があり過ぎてどうしても足元が浮いてしまう。宙に浮いた足をぶらぶらとさせていたら、なんだか酷い無力感に襲われた。

嫌いな姉にも優しくできるなんて、ラーズは懐広いわよね。でもあの女にはキスで、わたしにはこれって……扱いの差が酷い！

それがどうにも腹立たしくて、わたしはラーズをキツと睨んだ。

「そんな顔しても無駄だよ」

いつもなら喧嘩したり、わたしが近づいたりするとすぐに距離を取るくせに！ なのに今日は抱き上げられたまんまだし……本当に最近どうしたの？

丁度、胸の下に回されたラーズの腕に力が入って少し体に食い込んだ。硬く逞しい腕をまざまざと感じて自然と頬が熱が集まる。

こんな状況にもかかわらず、ラーズに触れられるのがこんなにも嬉しいだなんて……サイテーだわ。わたしってこんなに気持ち悪い人間だったんだ……嫌な感情を知ってしまった。

「……お前達はもう帰りな」

不機嫌を隠そうともせず、ラーズはため息混じりに女達に言った。

女達が帰ってようやくラーズの腕から解放されたわたしは、静かになった部屋の窓をさっそく開けた。

一刻も早く換気がしたい。そうして一人せつせと空気を入れ換えている間も、姉弟喧嘩は続いている。いたりする。

「明日であなたは成人するというのに、女を侍らせているだなんて……今は亡きお父様とお母様に申し訳が立たないじゃないの！」

「それ、一日中引きこもって、寝間着でうろついてる姉さんには一番言われたくないんだけど」

「うっ」

ソファアーに座り直したラーズの呆れた声にギクリと肩が強張る。片手で髪を掻き上げながら、

ラーズは気だるげに続ける。その姿にも胸が高鳴ってしまふのだから、わたしは大概重症だ。

「つたく……女を全員怒らせて帰らせるなんて、子供じゃあるまいし」

疲れ切った様子のラーズを前に、わたしはカーテンをぎゅっと握り締めた。

……確かに図星だけど。散々言われて腹が立ったんだもの。

「それと気軽に男の部屋に入ってくるなよな」

「一応ノックはしたわよ？ あなたがキスするのに夢中で気付かなかっただけでしょ？」

「俺が自分の部屋でなにしようと言句を言われる筋合いはないと思うけど？」

だからって！ と、喉から出かけた言葉をグツと呑み込む。

今夜、十二時ぎつかりにわたしはラーズに家督を譲つて家を出る、予定だからだ。でもってここから遠く離れた田舎に用意した別邸で、本に囲まれた隠居生活を送ることになる。そうなればもう二度と、こうして言葉を交わすこともない。姉弟ごつこは今日でおしまいだ。

こんな姉弟喧嘩もできなくなる。そう思うとなんだか切ない。

……困った。想像するだけで寂しさに胸が押しつぶされそう。

「つかさ、こんなものいっただこで手に入れたんだよ？」

まさかわたしが出ていくなどと微塵^{みじん}も思っていないであろうラーズが、先ほどわたしから取り上げた害虫防止スプレーを眼前で揺らす。

「それ？ 中身は自分で調合したから普通では売ってないんじゃないかしら。あなた専用の虫除けに丁度いいんじゃないかと思って」

「姉さんってサイテーだな」

ラーズはそう言つて小さく息を吐いた。それを横目に見ながら、わたしは密かに自嘲する。

自分が最低な人間だなんて、これまでの言動にくわえて、さっきの女達との一件で嫌というほど思い知っている。

「冗談よ。あなたと話をした後で書斎に行くつもりだったの。書斎の空気を入れ換えるついでに使うと思つていたのよ。本が虫食いだらけになったら嫌だから」

本当はそのために作った害虫防止スプレー。それがまさか義弟^{たか}に集る虫に使うことになるとは、わたしだつて思つてもみなかったわよ。と、やっぱり文句の一つも言つてやりたい。

「それよりも、最低なのはラーズの方じゃないの！ 毎日毎日、飽きもせず女を部屋に連れ込んで不潔だわ」

それに卑猥^{ひわい}だわ。ムツと口を噤^{つぐ}んで鼻白む。

感情的になりだしたわたしとの会話が面倒になってくると、ラーズは大抵その場からいなくなる。そうやって逃げられ続けてきたから、今回も同じパターンかとわたしは構えていた。

「不潔って……ああ、そうか。姉さんって男っ気ないもんな。ああいうのは全部そう見えるのか」

あれっ？ なんて？ やっぱりラーズがおかしい。ラーズが逃げない。

以前のラーズはわたしに近くにいるのも嫌がった。本当にここ最近の話だが、なぜだかラーズはわたしを避けようとしなくなった。

それとも今回は、女達を帰されたのがよっぽど腹に据えかねているのだろうか。思わずキョトン

と眺めていたら、彼は綺麗な黄金色おうごんしよくの目を伏せて小馬鹿にしたように笑った。

きつとわたしが笑えるくらい間抜けな表情をしていたのだろう。恥ずかしさに頬ほおがカッと熱くなる。

「てか、姉さん、好きな奴いるの？ それ以前に人を好きになったことある？」

「しっ、失礼ね！ わたしにも好きな人くらいいます！」

「……………BL本の登場人物だけど。それにもつというと本命はあなたなんですけど。というのはもちろん内緒だ。」

ムキになって言い返すと、ラーズの眉がピクツと動いたような気がした。

「……へえ。そんな格好でうろついている姉さんの姿を見たら、そいつ幻滅するんじゃないの？」

「っ！」

確かに、いくら楽だからって寝間着——ネグリジエで屋敷をうろつくのはやっぱり不味いか。でもなー楽だしなー。

わたしは自分の格好を見下ろした。こんな格好で屋敷をうろつくため、ラーズには日々怒られているがそれも慣れた。今ではなにを言われても右から左、のはずなのだが……

「わ、わたしはいいのよ！ どうせ誰も見ないんだから」

「ふーん」

好きな人の口から出た『幻滅』という言葉に動揺して、思わず早口で捲し立てる。

それにしても、さっきからダラダラとソファで寝そべっているのに、どうしてそう絵になるの

よ。わたしがやったらトドがデーンと昼寝しているようにしか見えないのを、完璧な美貌でカバーする。

我が義弟ながらカッコいいにもほどがある。

「正式の場ではちゃんとした格好で出てるんだから、別にいいでしょ？」

懲りもせずに言い張ると、ラーズは「はいはい」と妙に鼻につく相槌あいつづをした。

なんなのよー！ いつもそう文句ばかり言って……わたしの寝間着姿が癪かんに障るならこっちなか見なきゃいいじゃない……

だらしく顔だけ動かして、じつとこちらを見つめるラーズ。

はだけた胸元から覗く褐色の肌が妙に色っぽい。

先ほどまで女達と口づけを交わしていた男らしい肉厚の唇が、艶やかに孤を描く。わたしは義弟から漂う色香にオドオドと視線を床に泳がせた。

「な、なによ？」

「ネグリジエってさ、脱がせやすいようにできてるって知ってる？」

「……………へ？」

「セックスしやすいように」

「せ、セッ……って……」

カーテンの端を握ったまま絶句するわたしに、ラーズが声をあげて笑い出した。流石さすが女つたらしなだけのことはある。わたしが普段使えないような単語を臆面おくめんもなく言ってみせ

るのだから。

さつきからラースは恥ずかしいことばかり言う。遠慮のないラースの発言が大人の世界過ぎて、わたしは顔を真っ赤にしなが^うら俯^{うつむ}いた。

もう二十二歳なのに。引きこもりで普段から人とあまり話をしないから、そういう話題には気軽に参加できないし、ノリにもついていけない。

とはいえ興味はあるし、なにをするのかはBL本を読むくらいだから知っている。けれど、そういう行為を実践したことがない手前、どう返せばいいのかわからない。

ここでも義弟との差を見せつけられたようで、やるせなさに小さく唇を囁む。泣きそうだ。

「……姉さん、嘘だよ」

わたしがすっかり落ち込んでいることに気付いてやり過ぎたと思っ^ったらしい。ラースはばつが悪そうに言う。

「……からかったの？」

「ただそういう意味で捉える奴もいるってことだよ」

上目遣いでラースを見つめると、彼は一瞬息を呑んで、ふっと顔を逸^そらした。完全に憐^{あは}れまれている。

ラース以外に想える相手が見つからなくて、処女を卒業することができなかったのは確かに痛い。だって仕方がないじゃない。他の男性に触^ふれられることを想像するだけで、鳥肌が立って気持ちが悪くなるんだもの。

うー、わたしって馬鹿だわ。こんな女ったらしで冷たくて自分を嫌^{きら}ってる相手なのにどうしようもなく好きだなんて。それに……

——もし抱かれるなら、最初はラースがいい。

とか、性懲りもなく思ってしまうのだから救いようがない。

一度だけでも思い出として残しておきたい気持ちに駆^かられて、ラースの部屋の前まで来てノックをする寸前で我に返り、慌てて引き返したことから何度もある。

そもそも、抱いてほしいって自分から夜這いをかけられるくらいの度胸があつたら苦労しない。

こんな会話の最中にも、ラースとの情事を想像し、わたしが赤面しているなど目の前の当人は知るよしもないだろう。

「なに？ 随分顔が赤いけど……やらしいことでも想像した？」

「っ！」

勘がいいことこの上ない。

また元の調子に戻って楽しげにクスクス笑いながら、ラースは余裕の表情でソファに座り直した。その姿をボーッと眺めながら、わたしはさつきからどうしても確かめたくてうずうずしていたことを、無意味だとは分かっているにも聞いてしまっていた。

「……ラースは」

「ん？」

「ラースもその……この格好、そう思っ^って見てるの？」

「……はっ、なに言っただか」

意を決して尋ねるも、少しの沈黙の後、乾いた笑いで一蹴された。相手にすらされていないことをはつきり見せつけられ、途端、わたしは現実に取り戻された。

想い人にここまで見下される前に、もっと早く関係自体を切り捨てるべきだったのかもしれない。未練たらしく当主の座に託^{かこつ}けて居座り続けるのではなく、さっさと屋敷を出るべきだったのに。

「はあ……わたしはそんなことをあなたと話すために来たんじゃないのよ」

「じゃあ、なにに来たんだよ？」

少しでも長くラーズの傍にいたくて、今までどうしても去ることができなかったのだ。でも――

「姉さん？」

なにも言わないわたしを、ラーズが訝^{いぶか}しげに見つめる。わたしは表情を引き締め、改めて彼に向き直った。

頑張れわたし！ 言うなら今よ！

「ラウレンティウス・スピアリング……お父様の遺言通り、明日、あなたが十八になる誕生日にわたしはあなたに家督を譲ります。わたしは田舎にでも引っ越して隠居するつもりなので、後はあなたの好きになさってください」

よし、少し声が震えたけど言えた。ということできょうなら。

これで長年の悩みから解放される。

実は、引きこもり用の別邸に、権力をフル活用してちよつとした図書館を造らせておいたのだ。

悠々自適な隠居生活ならぬ引きこもり生活を想像して、心が躍る。

ラーズ。あなたのことは確かに大切だけど、ごめんなさい。読書も大切な。

すると、それまで余裕の表情でソファアに座っていたラーズが、驚いたように目を丸くした。

互いに息を潜め、妙な空気が流れる。

流石^{さすが}にこれはなにか言われるだろうな、と覚悟していたら――

「ふーん。そう」

「……………え？ それだけ？」

「好きにすれば？ 姉さんの人生なんだし」

興味なしといった風にすげなく返事をされ、拍子抜けする。

だって、そんな、あつさり？ いや、確かにわたしもサラッと許してくれるはず！ なんて思っ
てルンルンで来たんだけどね？ でも、他にもっとなにか……その……

物足りなさにモジモジとカーテンの裾^{すそ}を握^{にぎ}って、チラッとラーズを見る。

「で？ 他になにか用でもあるの？ 俺、忙しいんだけど」

「――っ。そう……そうよね。明日から家督を継いでラーズは色々と忙しくなるんだし……あは
はっ、ごめんなさい。邪魔しちゃって……」

疑うまでもなく、やつぱりわたしは、義弟に相当嫌われていたようだ。

わたしのことなんて娶^{めと}りたくもないのに、お父様への恩義でその条件を呑もうとしていた。しかし、目障りなわたしから出ていくと宣言してくれたのだ。冷静に考えれば、ラーズがわたしを止

める理由などあるわけなかったのに。

形だけでもいいから気にかけてほしかった、だなんて、なにを期待してたんだか。まるでわたしに興味の欠片かけらもないと言われているみたいだ。「いらない」って改めて突き放されたことに、指先が微かに震える。

ショックで血の気が引いていき、目に涙が盛り上がってくる。

顔面蒼白でフラフラしている姿を見せるなんてみっともないから、わたしはラーズの顔も見ないで逃げるように部屋を後にした。

第三章 正当な立ち位置

ラーズに告白する前から玉砕ぎんくさいした衝撃に、廊下をクラゲのようにふらつくこと数分。そうして廊下を漂っているうちにようやく頭が働くようになってきた。

ふうー。さっきはラーズにコテンパンにやられちゃったけど、それでも大人のわたしは至極冷静だわ。だってほら、さっきまでの出来事がなかったかのように、当初の予定通り書斎の掃除にとりかか——る前に、クルリと方向転換。

ああ、そうよね……。まずは調理場へ行かないと……

そして、料理長から受け取った大きなタコ壺を両脇に抱えたわたしは、スタスタと自分の部屋に

戻った。

まあ、あれよ。今回ばかりは、幼き頃のムカつくたびにタコを茹で上げる習慣が発動しちゃったのも致し方ないと思うのよ。

そんなわけで、後はベッドの上でいつも通り、茹で上がったばかりの赤くて丸い球体をひたすら頬張ほぼる。うん、塩味が効いて美味しいわ。

うっぷ。もうそろそろお腹の限界が近付いて……。でもあと一匹、タコ壺の底にタコ足が残ってる……

『ダメよ、わたし！ 泣き言なんか言っちゃダメ！ 分かっていたことでしょう？ 最初から。そんなことしたらこうなるって……』

『くうっ、当然分かってたわよ。でもっ、でもね？ こうする以外に方法がなかったの！』

『いい？ 毎回、毎回、一人劇場で気を紛らわしてるけど。何度繰り返せば気がすむの？』

『はあっ……仕方ないわね。とにかく今は耐えるのよ。お腹のタコが消化されるそのときまで！』

——そう、シリアスになり切れないわたしは、一人脳内で議論を繰り返しつつ、タコの食べ過ぎでハライタを起こしていた。

とりあえず寝間着で腰回りがゆるゆるしてるから安心だわ。限界の限界に挑戦してあと一匹……とタコ茹でに手を伸ばしたところで、わたしはハッと手を止めた。

この最後の一匹を食べて、盛大にハライタを起こしたら……。噂を聞き付けたお小言魔人ラーズがやってくるかもしれない。最近のラーズは口うるさいからきつと怒られる。

……うーむ。

ベッドの上でタコ壺抱えて思案している時間は五分もなかった。

あれからすぐ、わたしは潔くタコ壺の中から手を引っこ抜いて抱え直すと、自室を後にした。タコ壺片手に素早く移動して、当初の予定通り書齋に到着。さっそく掃除にとりかかった。

「ラースはわたしのいる場所には基本近寄らないから、今まで好き勝手にB L本を置いておくことができたけど……わたしがいなくなったら流石に書齋は使うわよね」

当主になる人間が書齋を使わないわけがないので、ここに残っている本は全てラースが目にして問題ないものに差し替えてある。

わたしは書棚を見つめながらお気に入りのB L小説に思いをはせた。

わたしが愛読しているB L本の主人公——エリオス・テュンダー。

彼は自身の主君でもある恋人に絶対の忠誠を誓う生粋の騎士で、褐色の肌に金髪、緑の瞳をした美青年だ。

瞳の色は違うけど、エリオス様は優しくて可愛かった頃の、昔のラースに似ている。だからエリオス様がわたしの好きな人なのは確かでも、彼はあくまでもラースの代わりというポジションだ。

そのエリオス様が出てくるB L本は、隠居先の本棚にしっかり収納されている。書齋にB L本は一切残っていないことは掃除中に確認できたから、一安心だ。

本来なら掃除は使用人に任せるところだけど、長年の引きこもり生活でお世話になった場所だもの。屋敷を出る前に自分の手でちゃんと綺麗にしてあげたいじゃない？

害虫防止スプレーは全部ラースに取り上げられちゃったから、はたきでパタパタするしかなかったけど。

一通り掃除が終わった書齋を満足げに眺めながら、わたしは中央に置かれた長椅子に「よしよ」と腰掛けた。

といっても、屋敷内はいつも使用人が綺麗に保ってくれるから、正直あまり変わった感じはしない。

ちなみに文字の読み書きができる使用人は、最上級の権限を持つ執事長やメイド長に限られるので、そこさえ口止めしておけばB L本があっても安心して掃除を任せられる。

それに、うちの使用人は噂話の一つもせず淡々とお仕事をこなす。融通の利かない堅物な者が多いものの、個人情報保護の面に関しては安全だわ。

というわけなんだけど、聞いてしまったのよね、わたし。その堅物な使用人達が珍しく書齋前でたむろって噂話していたのを……

いけないとは分かっていたけど、ついこっそり話に聞き耳を立ててしまったのだ。

なんでも、ラースには好きな人がいるとかで、正式なお付き合いとやらはことごとく断っているのだとかなんだとか。

ふうっ……ラースって基本チャラ男なのに、時々妙に真面目なのよね。我が家は主従揃って生真面目な者ばかり。

って、あれ？ そうなるとわたし、もしかしなくてもラースの密かな恋路のお邪魔虫？

正式に婚約したわけじゃないけど、婚約者的な立場のわたしがいたらやりにくいものね。でも、わたしが隠居宣言したからこれで恋の障害もなくなる……と。

なるほど、ラースがあっさり隠居を許可するはずね。

そもそもわたし、ちっちゃな頃から徹底的に避けられるくらい嫌われてたのに。最近少しラースが口を利きいてくれるように（お小言中心だけど）なったからって、調子に乗ってたんだけ。

ちよつとでもラースが引き止めてくれるんじゃないかって、心のどこかで期待していた自分が恥ずかしい。自意識過剰。

ラースにとつてわたしは甘い蜜たかに集る蟻あみみたいなもので、ラースの部屋にいた女達と同じ害虫か、目の上のたんこぶだ。

せめてもの償いとしてわたしにできることは、ラースが好きな人と幸せになれるように、一刻も早く屋敷を出て隠居するのみ、なんだけど……

「……どうしよう、美ガエルちゃん。ラースには好きにすればって言われたから言い出せなかったけど、今夜きつかり十二時に屋敷を出る予定です——なんて、ラースは全然興味ないわよね？ いつでも好きなときに勝手に出ていけば？ って感じだったし」

しゅんと肩を落としながら、長椅子に置かれていたカエルの抱き枕「美ガエルちゃん」を胸元でぎゅつと抱き締める。

勢い任せて隠居宣言したまではよかった。が、最も肝心な部分を言っていないのである。

だって、ラースが至極どうでもよさそうにしていたから……「知りたくもないことをいちいち報

告するな」とか「余計な気遣いするな」とか、ぐちぐち言われる気がしたんだものつ。

でも、言わなきゃ言わないで他に文句をつけられるかもしれないし……

数刻前、自分に向けられたラースの冷たい眼差まなざし。目障りだ、さっさと出ていけと言われていたようで背筋が凍った。

ラースの冷え切った顔を思い出し、美ガエルちゃんを抱く腕に力が入る。

ちなみにこの美ガエルちゃんとは、お父様が昔、異国から取り寄せた珍しいカエルをモチーフにした抱き枕だ。カエルといつても緑じゃなくて、真っ白な体とつぶらな黒いおめめの可愛いカエルちゃんである。

ラースをいじめるときに使ったような食用ではなく、観賞用に取り寄せられた綺麗なカエル。それをわたしは一目見ていたく気に入り、お父様にねだってそっくりな抱き枕を作ってもらったのだ。自分と同じ色彩を持つこのカエルが、当時我が儘小娘だったわたしには、ラースに嫌われている自分と重なって見えた。どうにも他人に思えなかったのである。

「もう十年以上経つからとどこどころ糸がほつれてきてるし、薄汚れて色も大分くすんできてるし……美ガエルちゃんというよりもボロガエルちゃんなんだけど、愛着があつてなかなか捨てられないのよね」

あまり好かれない部類の生き物という点でも、わたし達はとてもよく似ている。

就寝時はもちろん、読書中の相棒でもある美ガエルちゃんを、わたしは大人になった今でも愛用してたりする。

「——つて、わたしはもう屋敷を出るんだし、もろもろ悩む必要なんてないのよね。じめじめ暗くなつても仕方ないし。十二時になるまで、とにかくこれ以上迷惑かけないように極力気を付けて、見つかる前にとつとこ屋敷から出ていけばいいのよ！ うん、大丈夫、大丈夫。なんとかなる」

ようやく方向性が決まったところで、ふと窓の外に目を向ける。朱色の空が徐々に宵闇おややみに染まっていたの眺めながら、わたしはおもむろにスリッパを脱いで裸足になり、読書中いつもかけている眼鏡を外した。

ラースがしてみたいに、長椅子にゴロンと倒れると、近くのテーブルから本を手元に引き寄せた。表紙をそつと指先でなぞると、気持ち少し落ち着き、夢見心地で呟く。

「……あと少し。もう間もなくしたらわたしもそちらに参ります。エリオス様」

「それが想い人の名か」

まあわたしにとってエリオス様はラースの代わりというか、小さな頃のラースみたいな感覚だし……。好きな人（ラース）、イコール、想い人（エリオス様）でも間違いいではない？

「ええ、そうね。想い人といえば想い人だけ………ん？」

本来あつてはならない返しが聞こえた気がする——ハッ！

「ら、ラースう!? あつ——きやあああああつ!」

勢いよく起き上がった拍子にズルツと滑つて、わたしは本と一緒に長椅子から転がり落ちてしまった。床に激突する既の^{すんで}ところで、褐色の^{たくま}逞しい腕に抱き留められる。

「……なにをそんな慌ててるんだよ。危ないだろ」

「ご、ごめんなさい。ありがとう……」

床に落としてしまった本から視線を移し、おそろおそろ見上げると、不機嫌な顔のラースと目が合った。

「で？　またタコの食べ過ぎで動けなくなってるって聞いたけど？」

「……」

テーブルに置かれた空のタコ壺に目をやるラースに、ギクリと体が強^{こわ}張る。

……もう、
いったい誰がラースにタコ茹でのことをバラしたのよーっ！

「ム力ついたからってタコのどか食いに走るのには控えるよう、日頃から言ってるだろ？　すぐに腹

痛起こすんだからさ、食べ過ぎで」

「……はい。ごめんなさい」

殊勝に謝つてみせた、その瞬間。

『ぎゅるるるるる』

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

拝啓、反省しても止まないお腹の音。

そう、実は……治まっていたハライタがまたぶり返したのだ。やはり、お掃除しながら最後のタコを我慢できずにつまみ食いしたのがまずかったのだろう。

全部で六匹。ついに限界が来たのねと、書斎の高い天井を仰ぎ見て後悔する。

今朝方、医師に伝えてラース用に調査させておいた腹痛薬を、自分に使うことになるとは情けない。なんでも医師の話では、わたし用に少し調査し直すとかで、できるのに少し時間がかかるようだ。

「ほんと姉さんって懲りないよな……」

確かに、ハライタなのに無理を押して掃除を強行したのは不味かった。お腹は痛いし、当分タコは見たくない。

でも、そもそも、以前なら絶対わたしになんて近付こうとしなかったくせにっ。どうして今日はイレギュラーな行動ばかりとるのよ!?

くうっ、一人で書斎にいることに安心して、ラースに気付かないくらい臍^ふ抜^ぬけていたなんて……最悪だわ。

「……まだそんな物持つてるのか」

美^びガエルちゃんを顎^{あご}で指して、ラースは慣れた手つきでわたしを抱え直すと、長椅子に下ろしてくれた。ついでに落ちた本も拾ってテーブルに戻してくれる。

それから彼は一緒に座るでもなく腕を組み、こちらを見下ろす格好でわたしの前に静かに立っている。その整いすぎた肢体が眼前に迫り、思わず目が泳いだ。

「だってわたしカエル姫だもの……」

先ほどわたしを抱き上げたときの、ラースのわたしへの触れ方が妙に丁寧で優しく、不覚にもドキッとした。まるで大切な人を扱うみたいに感じてしまった自分が恥ずかしい……。照れ隠しに、

ラースから庇^ひうように美^びガエルちゃんを抱き締めた。

「わたし、自分が使用人達からなんて言われているかくらい、ちゃんと知ってるもの」

カエル姫は使用人達に陰で呼ばれているわたしのあだ名。昔、我が儘小娘だった頃に、ラースにカエルを投げつけていじめてたから……

「あと、ラースがわたしのこと嫌いなのも知ってるもの。小さい頃、沢山カエルを使っていじめてから。そのせいで今でもラース、カエル嫌いでしょ……?」

「……………」

思わず言ってしまったけど、沈黙するということは、やっぱり本心ではわたしを嫌いということらしい。あとカエルも。

いじめたのは本当にごめんなさい。イケメンなのに、カエルがトラウマとか……わたしのせいで……

「……別にカエルは苦手じゃない」

ラースが口を開いた。

でもわたしを苦手じゃないとは言ってくれないのね。カエルに負けた。つまりわたしはカエル以下。カエルに捕食される虫ということに……。ハエ!?

物思いに耽^{ふけ}るように黙り込むラースの綺麗な瞳を見つめると、ふいに目が合う。そして「フッ……」と静かに笑われた。

「なに?」